

JRA競走馬総合研究所スタッフが語る

# サラブレッドの おはなし

山中隆史

(JRA競走馬総合研究所栃木支所) = 文  
text by Takashi Yamanaka

昨年の夏に、わが国で36年ぶりに馬インフルエンザが発生し、競馬開催の中止（JRAでは2日間）や馬の移動制限など、競馬サークル全体に大きなショックを与えました。あれから早1年が経ちましたが、現在でも国内の競馬や乗馬の関連施設において感染馬が散見されるなど、いまだにこの病気がくすぶっています。

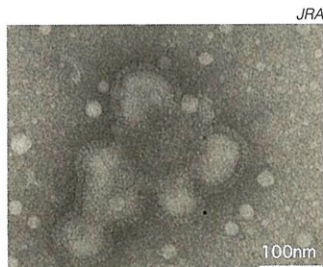
馬インフルエンザとは、馬インフルエンザウイルス<sup>1</sup>の感染による発熱や咳などを伴う急性呼吸器疾患の病名です。このウイルスは空気中を漂っているところを馬に吸い込まれることにより、鼻やノドの粘膜にくっつき増えようとします。この過程で、鼻やノドが損傷を受けます。一方、馬は自己防衛として、体温を上げてウイルスを弱らせようとしたり、咳をしてウイルスを体の外に追い出そうとします。こういった点では、人間のインフルエンザと酷似しています。一方、違う点としては、人間のインフルエンザには季節性があり、主に冬から春に流行しますが、馬インフルエンザの流行には季節性がないことがあげられます。また、自然界では馬のウイルスが人間に感染したことも、逆に人間のウイルスが馬にうつったりしたことも知られていません。馬インフルエンザへの防疫対策の最も大きな柱は、ワクチン接種の励行です。日本の競

## 馬インフルエンザ対策にはワクチン接種が効果的

走馬のほとんどは、1歳時に3回のワクチン接種を受け、その後、半年ごとに補強接種を受けています。人間のインフルエンザの場合、秋から冬に1回ないし2回接種することが多いと思いますが、馬インフルエンザの流行には季節性がありませんので、このように半年間隔で接種し、常に馬の抵抗力を高めているわけです。

前回の発生時、つまり36年前には馬インフルエンザワクチンはありませんでした。そのため、東京や中山競馬場（トレセン）がなかった時代<sup>2</sup>の在厩馬の90%以上が発熱や咳など、激しい症状を出しました。中央競馬に限れば1971年の暮れから約2カ月にはわたって関東の競馬が中止になりました。その被害の大きさを馬インフルエンザ対策の重要性が強く認識されるようになり、今では、全国レベルで競走馬を中心としたワクチン接種による予防体制がとられています。

昨年8月のトレセンおよび競馬場での流行時に発熱した馬は、在厩馬の13%弱であり、またほとんどの発熱馬は短期間（1〜3日）で回復しました。ワクチンは発病を100%抑えることはできませんが、かなりの効果があります。たとえ発病したとしても、軽度の発熱や咳など、軽い風邪の症状ですんでしまうことが多いようです。このように、馬インフルエンザはワクチン接種により人間がコントロールできる病気なのです。



昨夏、美浦トレセン在きゅう馬から分離された馬インフルエンザウイルスの電顕写真